

新連載 随想 三木市剣道連盟相談役 高橋洋三
「剣道よもやま話」橋本文吾先生の指導

昭和五十三年、僕は十八年ぶりに郷里の三木に戻ってきた。高校剣道部顧問歴十四年の経験を買われて、早速「三木東高校剣道部」顧問になり、その年、先に三木に就職していた小椋、田畑氏らの助けを得て「平田少年剣道教室」も立ち上げた。十月のことだった。

こう書けば剣道に関して相当修業を積んだように思われるかもしれないが、その方の腕はからきしで、当時三段、しかも教職員向けの夏季講習会で認定された、いわゆる講習三段だった。しかし、剣道への情熱と使命感は誰にも負けない自負があり、他校の教職員仲間、三木の剣道経験者、誰彼なしに教えを乞うたものだった。

こんな僕を助けてくださったのは、淡路津名町在住の橋本文吾先生だった。先生との不思議な縁を語れば長くなるので省略するが、その後の長い付き合いを考えると運命的な出会いだった。

橋本文吾先生は、所謂剣道専門家ではない。武専や体育大学で本格的に剣道を修業した方ではなかった。旧制赤穂中学で五年間剣道部に所属し、その後陸軍士官学校を出た職業軍人だった。戦時中のこととして、任官後ただちに北支戦線に派遣され、文字通り第一線で五〇回に及ぶ実戦を経験、軍刀を使つての中国兵

との命のやり取りを何度も経験した。終戦になって、シナの収容所に入れられ人民裁判を待つ身になった。戦犯と認められたら、ただちに銃殺の運命が待っていた。事実次々牢から「では、みなさまお先に」と連れ出された同僚は二度と帰ってこなかった。銃殺の判定を待つ間、恐怖のあまり発狂する者も出た。先生はそうならないために「死」以外のことに必死に思いを巡らせ、恐怖に勝とうとした。先生が一心不乱に思いを凝らしたのが、数々の実戦戦闘場面を思い浮かべながらの剣道だったのだ。そして、自分がこれまで習ってきた、防具をつけた道場剣道が実戦の場ではあまり役立たないということに思い至った。そうして固まっていたのが「橋本剣道」だった。

人民裁判で辛うじて命を助けられた橋本先生は、復員後思いもよらぬ仕事につくことになった。陸士の先輩の助力で「Kかまぼこ」の淡路島専売権を買い、夫婦して淡路島津名町に住み付いて、かまぼこなどの練り製品の販売を行う商売人になって糊口をしのいだ。

仕事を持つ橋本先生が淡路からバス、船を乗り継いで三木東高校に剣道を教えにきてくださるのは一日仕事である。仕事を持つ先生が三木に教えに来られるのは、土曜日か日曜日だ。手弁当、自腹の文字通りボラ

ンティアである。たとえば土曜日なら、放課の後、神出のバス停まで車で迎えに行く。バス停前の喫茶店でまず好きなコーヒー一杯。すでに稽古着に着かえたら生徒たちが待つ剣道場へ直行。そこから先生の指導が始まるのだ。

用意したパイプ椅子に座った先生は、竹刀を持つでもなく、剣道着に着替えるでもない。まして防具をつけて元立ちとなり生徒に稽古をつけるなど一度もしなかった。先生の指導は一口に言えば「指導しない」指導である。

生徒たちは普段僕が指導している手順で、体操をし、竹刀素振りをして、一汗かいて正座して待つ。橋本先生の指導。「竹刀振りをしろ」そこから延々一時間竹刀振りが始まった。僕ら教員は先生の指導を見守るだけである。一〇分、二〇分、三〇分。生徒の体から汗が噴き出す。何もすることがない僕や松川先生は「左手で振れ」「背筋を伸ばせ」「声を出せ」などと注意をしていたが、それも次第に飽きて、トイレに行ったり、職員室に戻ったり。

その間、橋本先生は椅子に座ったまま。居眠りをしているのかと思つたがさにあらず、身動きもしないで凝然としたまま、眼光鋭く虎の眼で生徒の竹刀振りを見つめ続ける。そして時折、素振りを止めて、たつた一言指示を飛ばす。「声を床に向けて出せ」「右手をずらし、左手に付けよ」素振り再開。垂をつけ、胴をつけて素振り再開。また二〇分後、「気迫を出せ」「やめ！」小手をつける。素振

り再開。「もっと声を床に叩き付けろ！」

すでに二時間近く断続的に竹刀素振りをし続ける生徒たちだ。汗が稽古着を濡らしている。夕日が道場の西側の窓を真っ赤に染めるころ、見よ！生徒の体は弓なりになり、腰が前にせり出している。声は短く鋭くなり、竹刀の先に体重が乗っているのがわかる。先生の帰りのバス時間が気になるころ、ようやく防具着用が指示される。それからは一気呵成だ。先生が工夫したパターン練習。コテ喉、メン喉、引きメン喉、元立ちコテ

に來るところを抜いてメン喉等々。「呼吸を一本一本止める。」「打った後剣先は必ず喉へ。」「下腹に力を入れ呼吸を止める。」「声を短く止めれば、何十回打つても呼吸が乱れない。」

十数種類ある先生独自のパターン練習で一日の稽古は終わる。結果、生徒の動きは鋭くなり、打突に冴えが出る。パクツと音がする。竹刀が早くなっている。見ている僕らは、あまりの生徒の変化に呆然とする。それでいて、先生の指導はほとんどない。短い指示の言葉だけだ。技の解説も、稽古の意義も、一切の説明がない。教えを受ける生徒が自分で考え、自分で自得する指導法である。

「声を出せ」「気迫だ」この指導だけで、津名高中野きよみは県優勝し、インターハイ出場権を得たし、三木に来て小椋・田畑の会社に入ったチムメイトの形本ゆかり（現姓平尾）は、三木市初、東播親善剣道大会で個人優勝した。